

漁業経済学会 短 信

1989年度漁業経済学会（第36回）大会に 参加して

中央水産研究所 三 木 克 弘

漁業経済学会第36回大会が、5月27・28日の両日長崎大学水産学部において行われた。私は旅費がないこともあって、本大会には当初参加しない予定であった。しかし、大会の10日程前に東京水産大学の廣吉先生から電話を戴き、何か個人報告をするよう勧められた。私が大会には参加しない旨を伝え、研究者が学会に参加しないとは何事かとお叱りを受け、そのため急遽参加する事となった。そして付け焼き刃的ではあったが、当時研究していた小型いかつり漁業の光力規制問題について報告することとなった。また、旅費については当初自費で行くことを考えていたが、当初から参加を予定

していた室長の多屋氏の御好意により、氏の旅費を半分戴き、1人分の旅費で2人で参加することとなった。

こういった状況の中で参加した大会であったが、今回の大会は私にとって有意義なものとなった。それは、今回初めて個人報告を行ったことにより、これまで私が大会に対して抱いていたイメージを大きく変えることが出来たからである。つまり、これまで大会と言えば自分の興味のある報告はおもしろいが、それ以外の報告は退屈で、2日間耐えるには相当の忍耐が必要であると考えていた。また、これまでは聞き手であったということもあって個人報告を単に情報提供位にしか考えていなかったが、今回短時間にせよ報告者の立場に立つことによって、報告を行うということが単に情報提供に留まらず、自分の研究の再チェックの場となることを認識した。つまり、短時間にせよ報告するためには、報告の論旨を明確にしておく必要がある。1人で研究をしていれば、細かいところはどうしてもいいかげんに済ませてしまいがちであるが、いざ発表となるとそうはいかない。質問されてつじつまが合わなくなると恥をかくので細かいところまで十分考えた上で報告する。これだけでも十分な意義があると思われるのに、さらに質問により自分の全く気付かなかった点などを指摘されることもある。また、1人で研究

目 次

1989年度（第36回）漁業経済学会に参加して	三木克弘……………1
第36回漁業経済学会大会報告……………2	
一般報告……………2	
シンポジウム……………3	
総会議事……………3	
在京理事会報告（6.29）……………4	
在京理事会報告（9.8）……………5	
会費値上げのお知らせ……………6	
短信へ投稿のお願い……………6	

をしているとどうしても片寄った考え方に陥入りがちであるが、このような場で多くの先生方に聞いてもらうことにより貴重な助言を得ることが出来る。このように、自分の研究のチェック機構あるいは軌道修正の場としての大会の意義に初めて気付いたのが今回の大会であった。また、自分で報告を行って初めて他人の報告の苦勞がわかり、他人の報告も自ずと熱心に聞くようになる。また、聞き方も単に内容に留まらず、研究課題の設定から論旨の組立、発表方法など細かい点まで注意して聞くようになる。これまでの私の大会参加はどちらかと言うと消極的参加であったと反省せざるを得ない。今回の大会を契機に今後さらに積極的参加をしていきたいと考えている。

また、今回の長崎行は大会以外でも感慨深いものであった。それは長崎が私の出身地であり、

また私が社会人としての第一歩を踏み出したのも、5年前の長崎だったことによる。従って久しぶりに長崎に帰ったということで、当時の職場の人たちと旧交を暖めたことは言うまでもない。結局26・27日の2日間で6軒の飲み屋を回ったように記憶している。このような事態を想定して、個人報告の順番をなるべく遅くしてもらうように事前に学会の事務局に頼んでいたのだが、期待に反して午前中の5番目の報告ということで、発表当時体調が必ずしもベストとは言えない状況であったことを最後に付け加えておく。

今回の大会では、会場を提供して頂いた長崎大学の方々にはもちろん、大会運営をされた事務局の方々、また大会参加を強く勧めて頂いた廣吉先生と旅費の面でお世話になった多屋氏に特に感謝の意を表したい。

第36回漁業経済学会大会報告

学 会 事 務 局

5月27日(土)～28日(日)の両日、長崎大学水産学部において、第36回漁業経済学会大会が開催された。

第1日の一般報告では15題の報告があり、第2日のシンポジウムは『日本漁業の国際化と流通、消費構造の変化—円高問題を中心に—』のテーマで実施され、多数の参加者を得て、活発な討論がおこなわれた。

大会プログラムはつぎのとおりである。

一般報告

1. タンガニーカ湖北西部地域における漁業の諸類型と漁業発展の諸問題

近畿大学 榎 彰徳

2. 「漁業管理シミュレーション」の意義と問題点

東京水産大学 長谷川 彰

3. 漁場利用秩序の構造

— サケ定置網漁業地域を事例に —

北海道大学 宮崎 隆志

4. モジャコ採捕漁業の存位構造

三重大学 長谷川健二

5. 小型いか釣漁業における光力規制問題

— 新潟県の小型いか釣漁業を例にして —

中央水産研究所 三木 克弘

6. イワシが去った後の水産業界

東京水産大学大学院 佐久間美明

7. 個別経営の販売対応と産地流通の二重構造

— 大分県のブリ養殖業を事例として —

南九州大学 古林 英一

8. 漁村の振興と漁協コミュニティ

水産大学校 島 秀典

9. 漁業権消滅と漁民

鹿児島大学 片岡千賀之

10. 千葉県沖合底曳網漁業における生産構造の変化

東京水産大学 馬場 治

11地録網録制成立に関しての一考察

— 近世前期能登内浦地方において —

日本学術振興会特別研究員 伊藤 康宏

12船曳イカ釣漁船の船内労働過程

— 生産と商品化の過程 —

海上労働科学研究所 三輪 千年

13漁業分野における日ソ漁業協力の可能性

北海道大学 鈴木 旭

14労働力市場の自由化と日本の水産業

日本総合研究所 田坂 行男

15世界の漁業生産、水産貿易における日本の位置づけ

— 1980年代を中心として —

山本 忠

シンポジウム

テーマ『日本漁業の国際化と流通、消費構造の変化 — 円高問題を中心に — 』

1 日本漁業の国際化 — 問題の所在 —

東京水産大学 小野征一郎

2.円高の水産物需給構造への影響

中央水産研究所 多屋 勝雄

3.水産物貿易構造の現状と展望

東京水産大学 廣吉 勝治

4.円高と水産物流通変化

— 西日本産地市場を中心に —

長崎大学 濱田 英嗣

5.コメンテーター 長谷川健二、松田恵明、

米田一二三

6.総合討論

司会：倉田享、片岡千賀之

総会議事（抄録 1989.5.27）

議長（酒井亮介）選出、代表理事（中井昭）の挨拶の後、下記の議事について審議した。

1. 昭和63年度事業報告

昭和63年度の活動報告、会誌発行、短信信行等。

2. 昭和63年度会計決算報告、監査報告。

資料1参照。

会費未納者の督促をおこない、会費の納入

を確実にしたい。

3. 平成元年度事業計画案

大会開催地（東京水産大学）予定、シンポジウムテーマ（『日本漁業の国際化』のテーマでもう1年続ける）、会誌編集方針、短信発行方針など。

4. 平成元年度予算案

資料2参照

会費値上げ 一般会費7,000円、学生学費4,000円（1990年度から実施）を決定した。

1989年（平成元年）のボーナスカンパについては在京理事会で検討する。

5. 学会賞選考委員会報告及び学会賞授与

・学会賞

加瀬和俊『沿岸漁業の担い手と後継者』（昭和63年発行 成山堂）

・学会奨励賞

宮沢晴彦、受賞対象論文は『漁業経済研究』などに発表された、漁場利用に関する一連の諸論文。

6. 次期役員の選出

つぎの役員を選出した。

理事：秋山 博一 二野瓶徳夫 高山 隆三
平沢 豊 長谷川 彰 中井 昭
大海原 宏 ○小野征一郎 ○加瀬 和俊
堀口 健治 ○増井 好男 ○多屋 勝雄
○三輪 千年 ○大崎 晃 ○廣吉 勝治
○宮沢 晴彦 ○田坂 行男 秋谷 重男
浦城 晋一 内藤 一郎 柿本 典昭
倉田 享 ○榎 彰徳 大島 襄二
志村 賢男 中楯 興 八木 庸夫
岩切 成郎 ○片岡千賀之 ○島 秀典
○中居 裕 ○長谷川健二 ○濱田 英嗣
池田 均 鈴木 旭 ○増田 洋
○服部 昭

○印は常任理事

監事：米田一二三 岡 伯明

第1回理事会（新理事）において、大海原宏氏（東京水産大学）を代表理事に選出した。

資料 1

1988年度決算報告(1988. 4~1989. 3)

1 収入の部

(円)

2 支出の部

(円)

科目	予算	決算	増減	科目	予算	決算	増減
会費	1,300,000	838,000	-462,000	会誌印刷費	1,500,000	1,651,037	151,037
カンパ	200,000	188,000	-12,000	通信発送費	80,000	95,890	15,890
会誌売上	150,000	145,400	-4,600	事務局費	50,000	19,135	-30,865
大会収入	100,000	132,000	32,000	会議費	80,000	72,440	-7,560
寄付金	450,000	450,000	0	大会経費	200,000	221,431	21,431
雑収入	50,000	33,191	-16,809	負担金	42,000	0	-42,000
小計	2,250,000	1,786,591	-463,409	雑費	10,000	0	-10,000
前期繰越金	756,261	756,261	0	小計	1,962,000	2,059,933	97,933
				繰越金	1,044,261	482,919	-561,342
合計	3,006,261	2,542,852	-463,409	合計	3,006,261	2,542,852	-463,409

3. 財産目録(一般会計)

郵便貯金	7,892
銀行預金	195,269
現金	279,758
合計	482,919

4 財産目録(特別会計)

郵便貯金	750,000
計	750,000

資料 2

1989年度予算(1989. 4~1990. 3)

1 収入の部

(円)

科目	予算
会費	1,300,000
カンパ	200,000
会誌売上	150,000
大会収入	100,000
寄付金	450,000
雑収入	50,000
小計	2,250,000
前期繰越金	482,919
合計	2,732,919

2 支出の部

(円)

(円)

科目	予算
会誌印刷費	1,600,000
通信発送費	80,000
事務局費	50,000
会議費	80,000
大会経費	250,000
負担金	42,000
雑費	10,000
小計	2,112,000
繰越金	620,919
合計	2,732,919

7. 学会賞選考委員の選出

八木庸夫, 小野征一郎, 高山隆三, 増田洋氏
を改選し, 倉田亨, 堀口健治氏は留任する。
新たに, 長谷川彰, 大海原宏, 廣吉勝治,
秋谷重男氏(次点鈴木旭)を選出した。
大海原宏氏の代表理事就任にともない, 鈴木

旭氏が委員となる。

在京理事会報告(1) (1989. 6. 23)

1. 常任理事の任務分担

各常任理事の役割, 責任の明確化, 一部理事への負担集中の解消, 学会組織活動の円滑

化などを趣旨とする任務分担案が提出され、以下のような任務と担当者の配置が了承された。

代表理事	大海原 宏
総務主任	小野征一郎
総務補佐	廣吉 勝治
会計担当	宮沢 晴彦
会計管理担当	三輪 千年
短信担当	増井 好男
発送担当	馬場 治
Biblio担当	田坂 行男, 三木 克弘
地方常任理事担当	多屋勝雄
会誌総務担当	加瀬和俊(代行 三輪千年)
編集委員	長谷川 彰(委員長)
	高山 隆三, 秋谷 重男
	片岡千賀之, 大崎 晃
	小野征一郎, 多屋 勝雄
	三輪 千年, 加瀬 和俊
	増田 洋, 浦城 晋一
書 記	三木 克弘, 佐久間美明
	馬場 治, 宮沢 晴彦
	廣吉 勝治

(三木, 佐久間, 馬場各氏には理事会にオブザーバーとして出席していただき事務を補佐してもらうこととなった。)

各任務の内容に関して、とくにBiblioは基本的に会誌に毎号掲載を目標とすること、財政困難のため例年より2カ月早く、7月中に会費未納分の請求を行うこと、新しい会員名簿を早急に作成することなどが確認された。

2. 第37回大会シンポジウムの計画

このことについて、「国際化、水産物輸入の国内生産への影響」「外国人労働者問題」などテーマに関する意見が種々出されたが、テーマ、コーディネーター、報告者などは、引き続き次回の理事会で検討することとなった。

3. 学会誌バックナンバーの販売価格

会員外については現在の定価(各巻5,000円, 合併号2,000円, 単号1,500円)を適用するが、会員は11巻以降につき、1律1冊1,000

円として販売を図ることとした。

なお、次年度からの学会費値上げ(5,000円→7,000円)に伴う会誌定価の改訂については今後検討することとなった。

4. 水産学関連学会連合会の共同シンポジウム
同会より来年4月「水産におけるハイテク・バイテク」に関する共同シンポジウムを開催したいとの提案があり、意見を求められているが、基本的には同会でもう少し趣旨内容を検討してもらったうえで対応を考えることとした。

5. その他

学会賞選考委員会で過去の受賞者リストを作成してほしいとの要望があった。

在京理事会報告(2) (1989. 9. 8)

1. 第37回大会(次期)シンポジウムのテーマ
前回の在京理事会に引き続き、次期シンポジウムのテーマ設定について検討した。

統一テーマとして『日本漁業の国際化』を及ぶことは、すでに決定しているが、その内容をどのように扱うか、種々の意見が出され、結論は次回(10月予定)の理事会に持ちこすこととなった。

とくに、今年度のシンポジウムでは、「国際化による生産構造への影響」の検討が残されたため、次年度は、「国際化による国内漁業への影響」を検討する必要がある。との意向が強かった。

たとえば、水産物の供給構造の変化(輸入水産物の増大)によって、日本の漁業構造がどのように変わってゆくか。日本漁業の衰退—高齢化・後継者の不足—によって、海の利用が資本の論理によって、他の分野に転換される心配がある。すなわち、環境保全問題が発生し、日本人の生存基盤がゆらぐことにならないか—したがって、日本漁業は生産機能のみを問題とするだけでよいのか。沿岸漁業を問題としてとりあげるばかりではなく、中小漁業問題こそ重視すべきではないか。水産資本、輸入業者のビヘイビアー、量販店の比重

の増大 — 素材型から加工型へ — といった問題も無視できない。

このように、多様な意見が出されたため、大海原宏氏（代表理事）が、これらの意見を踏まえうえて、原案（コーディネーターをも視野において）を作成し、次回の理事会に提案し、再検討することとなった。

2. 『漁業経済研究』の編集状況について

大会特集号の原稿は、ほぼ集まっており、なるべく早く発行できるように努力中である。

3. 会計の状況について

会計の状況は、きびしい財政事情にあるが、来年度（1990年度）からの会費値上げと会費納入の徹底をはかることによって、しばらくようすをみることにしたい。

会費値上げのお知らせ

本学会の会費は1989年度の総会において1990年度からつぎのように会費を値上げすることに決定いたしました。

一般会費 — 5,000円(旧) → 7,000円(新)

学生会員会費 — 3,000円(旧) → 4,000円
(新)

ご承知のとおり、本学会の財政事情は、きびしい状況にありますので、ご協力下さいますようお願いいたします。とくに、会費のすみやかな納入にご協力いただき、滞納のないよう切望いたします。

学会短信へ投稿のお願い

学会短信を学会員の意見交換の場として活用するため、学会員の積極的なご意見のご投稿をお願いいたします。あて先きは、下記のとおり。

〒156 世田谷区桜丘1の1の1

東京農業大学農業経済学科内

漁業経済学会短信担当

増井好男

電話 03-420-2131 内線456

FAX 03-420-2260

学会短信 №58

1989.9

事務局

〒108 東京都港区港南4-5-7

東京水産大学内

電話 03(471)1251